

Don Giovanni

マリウシュ・クヴィエチエン



どんな人物像も、演技も、歌い方も、一面的であってはならない

——大震災直後の六月にメトロポリタン歌劇場と共に来日されたことがまだ印象に残っています。来年の四月には待望の「ドン・ジョヴァンニ」でまたお会いできますね。とても楽しみにしています。

クヴィエチエン(以下K)●実は私の「ドン・ジョヴァンニ」の初舞台は日本でした。九年前の小澤征爾音楽塾のオペラ・プロジェクトでのごです。小澤征爾さんとのリハーサル、そして舞台は、私にとって本当に意義深いものでした。あのとき以来、「ドン・ジョヴァンニ」だけでなく、日本もまた私にとって、多くの友のいる大好きな国となりました。なにより「ドン・ジョヴァンニ」は、歌手にも、演出家にも、様々な可能性を与えてくれる素晴らしいオペラです。

——だからあなたのドン・ジョヴァンニは相手の女性歌手に応じて変化すると言われるの

「ドン・ジョヴァンニ歌い」マリウシュ・クヴィエチエンが、オペラ・パレスに初登場。彼のドン・ジョヴァンニはどれひとつとして同じではなく、それでいてどれも印象深い人物像だと世界で絶賛されている。メトロポリタン歌劇場でただ今話題の新演出「ドン・ジョヴァンニ」でもタイトルロールで出演中。そんなクヴィエチエンにとってドン・ジョヴァンニという役は……？

ですね。

K●「ドン・ジョヴァンニ」は女性と会えば即座にその女性が何を望んでいるのか見抜く眼力を持っています。優しい男性を望んでいるのか、強く、引っぱ張って欲している男性を望んでいるのか、彼はそれらを即座に見抜き、彼女たちに与えるのです。だから悪魔かもしれないですが、相手の女性にとっては天使でもあるのです。甘い蜜のような魅力も持ち合わせている男性でなかったら、カリスマ性がなかったら、女性は惚れてくれません。ただ悪いだけではないのです。どんな人物像にしても、演技にしても、歌い方にしても、一面的であってはならないと思っています。物ごとにはいろいろな側面があるものです。『囁く』ほうが『叫ぶ』よりも深く人の心に響くことがあるように。

——でもいろいろな人物像、特にドン・ジョ



©三浦興一/メトロポリタン・オペラ2011年日本公演
写真提供:ジャパン・アーツ

ヴァンニのような人物像を把握するためにはご苦労もあつたのではありませんか。
K●もともと人が好きで、人の心の動きや心の裏といったものに興味があった私は、音楽の道に進む決心をする前、大学で心理学を学び、カウンセラーの経験もしました。それらが私の

演技においては大きな助けとなっています。

あるとき「ドン・ジョヴァンニ」の公演を終えて帰ろうとしたところ、品の良い老婦人が私に「あなたのドン・ジョヴァンニは本当にどうしようもないドン・ファンだった。あんな風に演じられるのはあなた自身が多くの女性を泣かせているからに違いない」と言っていて、突然持っているパラソルでお尻を叩こうとしたのです。私はびびりして「マダム、

モーツァルトが書いた様々な役を歌える限り一生歌い続けたい

——若いころにはフルートも吹いていらしたと聞きましたが、若いときからオペラがお好きだったのですか。
K●フルートは学生時代に吹いていただけです。そしてあのころはオペラが嫌いでした。

ですから十八歳になるまでは歌曲ばかり歌っていました。その後クラコフの音楽院に進学し、いろいろなコンクールで入賞を果たし、二十一歳のときにワルシャワに移ってからオペラを歌おうと決めました。このときに新しい先生に付いたことも私をオペラに向かわせるきっかけとなりました。声が成長して力強くなり、先生や多くの人に背中を押されてオペラを歌う決心がいったのです。オペラを歌うようになったのは声が強くなったのも理由のひとつですが、オペラを持つ演劇性に強い魅力を感じるようになったことも大きかったです。今ではオペラが本当に大好きです。何が起きるか分からない舞台に立つオペラの面

あれは私ではありません。ドン・ジョヴァンニです。なにしろ私は私生活では家に帰るとホッとするようなごく普通の人ですからね。この事件には戸惑いましたが、実際の人生経験を伴わないことでも真実味を持って演じられた証ともなりました。私の好きな俳優のロバート・デ・ニーロやアル・パチーノだって、本当にギャングのボスだったわけではありませぬからね(笑)。

白さには代えがたいものがあります。特に二十一世紀のオペラにおいては、いい声と歌唱はもちろんのこと、演じることも強く求められます。その演劇的な側面がオペラをより面白くしているのだと思います。

——最近ではシマノフスキのオペラ「ロジェ王」でも高い評価を得ていらっしゃいますが、あなたのレパートリーの中でモーツァルトはどのような位置を占めているのでしょうか。
K●私はモーツァルトのほかにヴェルディの「ドン・カルロ」「椿姫」といったベルカンの作品を歌ってきました。その中でモーツァルトの作品は音楽的に決して容易ではありませんが、その役柄の演技と一緒になるととても歌いやすいのが特徴かもしれません。声に優しい音楽だという人もいますが、私にとっ

てはただただ偉大な音楽といったところでしょうか。モーツァルトはあらゆる声質のための音楽を書いています。そして彼の音楽で

多くの経験を積んだ後にヴェルディやワーグナーの重い役を歌うと、声自身がどのように反応したらいいのかを自然に学んでいることに気づかれます。私個人としては、モーツァルトの書いた様々な役を、歌える限り一生歌い続けたいと思っています。

——これだけ売れっ子で忙しい毎日を過ごしながら、趣味で写真も撮っていらっしゃいますね。
K●ええ、仕事柄世界中を旅していますので、いい気分転換です。リハーサルの合間や休暇で訪れた国々で撮った写真を見た知り合いから写真展をやらないかと言われて、写真展も行いました。展示会にいらつしやれなかった方々のために、その一部をホームページに載せています。

——最後に日本のみなさんに一言お願いします。
K●「ドン・ジョヴァンニ」は音楽的にも、演劇的にもとても楽しめるオペラであり、ひとつの作品の中で様々な感情を味わっていただけのことだと思います。ぜひいらしていただき、共に興奮のひとときを過ごしていただければ嬉しく思います。

そして、最後になりましたが、震災後の六月に日本にうかがったのに続いてまた日本の地を踏めることは、私にとってもとても意味のあることです。まだまだ辛い思いをなさっている方も多いかと思いますが、決して希望を失わないでください。日本は本当に素晴らしい国です。そしてその日本を想う友は、私を含め世界中にたくさんいることを思い出していただければ幸いです。

Mariusz Kwiecien

ポーランドのクラコフ生まれ。メトロポリタン歌劇場、英国ロイヤルオペラ、ウィーン国立歌劇場、パリ・オペラ座、バイエルン州立歌劇場、ボリショイ劇場など世界各地で活躍。国際的キャリアを築き上げにもなった「ドン・ジョヴァンニ」タイトルロールのほか、「フィガロの結婚」アルマヴィーヴァ伯爵、「エウゲニ・オネーギン」タイトルロール、「愛の妙薬」ベルコレなどをレパートリー多数。2011年6月メトロポリタン歌劇場日本公演に「ラ・ボエーム」マルチェロで出演。新国立劇場初登場。